

## 2014年台湾統一地方選挙情勢

小笠原 欣幸

2014年11月29日，台湾で統一地方選挙の投開票が行なわれる。この統一地方選挙は，台湾の全22縣市における県市長，県市議員，郷鎮（市）長，郷鎮（市）代表，村長・里長を選出する。過去においてはこれらの選挙が異なる時期に実施されていたが，しだいに選挙時期が調整され，今回初めてすべての地方選挙がいっせいに行なわれることになった。今回の有権者は総統選挙の有権者とほとんど同じなので，県市長選挙での国民党，民進党の得票状況は2016年総統選挙の指標となる。投票10日前の情勢判断に基づき，県市長選挙に限定し全22縣市の選挙情勢を簡潔に報告したい。

《表1》 県市長選挙の主要候補者名および選挙情勢

縣市	上段：両党公認候補と主要無党籍候補の氏名およびそれ以外の候補者の数 下段：選挙情勢（候補者の年齢は投票日時点）							
	基隆市	民進党	林右昌	国民党	謝立功	無党籍	黄景泰	その他
	現職市長張通榮の評判が悪く，国民党は中央と地元との意向が最初から食い違い大きくしゃくした。公認を得た市議会議長黄景泰（49歳）は国民党の基礎票と個人票を擁し当選確実視されたが，汚職の容疑で逮捕され，国民党は公認を取り消し，国家安全会議諮詢委員の謝立功（53歳）を新たに公認した。しかし，謝は地元での活動歴がまったくない。黄景泰は拘置所で身柄を拘束されたまま立候補登録をしたので，国民党は分裂選挙になった。民進党公認の林右昌（游錫堃派，43歳）は，地元で長く活動し，前回の市長選，立法委員選挙では落選したが知名度を上げた。馬政権の不人気と党内部の混乱で謝立功の支持率は伸びず，国民党市政を批判する林右昌が優勢になった。拘置が続く黄景泰は本人の選挙活動ができないので，家族が必死で同情票を集めている。国民党の票が完全に割れ，林の独走状態である。民進党は1997年選挙で李進勇が当選して以来の勝利となる。							
台北市	民進党	none	国民党	連勝文	無党籍	柯文哲	その他	5名
	国民党の予備選挙で同市選出立法委員の丁守中（60歳）と連戦榮譽主席の息子連勝文（44歳）が争い，連勝文が公認候補になった。民進党は同市選出立法委員の姚文智が党内の予備選で勝利したが，泛緑の背景を持つ無党籍の柯文哲候補（55歳）との共倒れを防ぐため両者の民意調査を実施した。柯が姚を上回ったので民進党は公認候補を立てず柯を支援することにした。柯は台湾大学医学院の教授で台湾大学病院ICU主任を兼任する医師。野党大連合を唱えているが政治経験はない。連勝文の支持率は，出だしは高かったが選挙戦が本格化した6月以降下がり始めた。これは							

	<p>候補者の魅力が弱かったことと陣営の選挙戦略の失敗が要因である。柯文哲候補は失言もあったが、民進党に入党せず、独自の選挙スタイルを貫いた。柯文哲が大幅リードする展開が数か月続き選挙情勢は安定化した。その趨勢は11月7日のテレビ討論でさらに固まった。国民党は台北市で十分な基礎票を有しているが、候補者の資質と馬政権の不人気为重なり一部が柯文哲支持に回りその優位が崩れている。他に、ひまわり学生運動が中台の過度な接近に警鐘を鳴らしたことで、中国との関係が深い連家の人物が首都台北の市長になることに警戒感が出たという要因もある。藍緑対決に持ち込んで国民党票を引き締めようという連陣営の戦略も空回りし、終盤戦で差がさらに開く傾向が見える。想定外の事件・事故でもない限り柯の当選は確実である。国民党の予備選挙で丁守中が勝っていれば選挙戦の展開は異なっていたというのが多くの専門家の見方である。国民党が台北市で歴史的敗北を喫することになるであろう。</p>							
新北市	民進党	游錫堃	国民党	朱立倫	無党籍		その他	1名
	<p>現職の朱立倫（53歳）と元行政院長の游錫堃（66歳）の対決。基礎票で国民党が優勢であることに加え、候補の魅力の差で朱圧勝の勢いである。朱は総統選挙出馬が取りざたされているので、焦点は朱の得票率がどこまで伸びるかである。55%が一つの目安である。ここでは馬政権の不人気はあまり影響していない。民進党は朱の得票率を押さえこみ総統選出馬の芽をつみたいが離されている。游の得票率が45%に達しなければ人口最大の市で民進党の候補擁立戦略に問題があったことになる。</p>							
桃園市	民進党	鄭文燦	国民党	吳志揚	無党籍		その他	1名
	<p>桃園県が直轄市に昇格し六都の一つとなって初めての市長選挙。吳志揚（45歳）と鄭文燦（新潮流派、蔡英文とも近い、47歳）の対決は前回の桃園県長選挙と同じ。前回、吳志揚は国民党榮譽主席吳伯雄の子息というだけでアピール力に欠き鄭文燦に追い上げられたが、今回は現職の強みで安定している。ここでも馬政権の不人気はあまり影響していない。鄭は今回出馬するつもりではなかったが他に候補がおらず再出馬となった。六大都市の一角桃園での民進党の基盤の弱さを示す。</p>							
新竹県	民進党	none	国民党	邱鏡淳	無党籍	鄭永金	その他	2名
	<p>再選を目指す国民党の現職邱鏡淳（64歳）に前職の鄭永金（65歳）が国民党を離党して無党籍で挑む。長年新竹県で対抗してきた国民党系二大地方派閥同士の戦い。基盤の弱い民進党は公認候補擁立を見送り、鄭永金を支援。しかし、邱鏡淳の優勢は動かず当選確実。民進党の候補擁立戦略の是非は次の総統選挙で検証される。</p>							
新竹市	民進党	林智堅	国民党	許明財	無党籍	蔡仁堅	その他	2名
	<p>再選を目指す国民党の現職許明財（61歳）が優勢。民進党は若い市議林智堅（柯建銘系、39歳）を擁立したが、世代交代に反発する元職蔡仁堅（62歳）が民進党を離党して立候補したのでもともと少ない民進党の票が割れた。民進党結党メンバーの蔡仁堅は1997年市長選挙で当選、スキャンダルがあったが一定の支持者がいる。</p>							

苗栗県	民進党	呉宜臻	国民党	徐耀昌	無党籍	康世儒	その他	3名
	基礎票で国民党が圧倒的に有利で，公認候補の徐耀昌立法委員（59歳）が当選確実。民進党は蔡英文に近い呉宜臻立法委員（44歳，女）を擁立。苗栗県では土地収用をめぐり現県長劉政鴻への批判が全国的に広がり公民団体の活動も活発化したが，苗栗県での民進党への追い風になっていない。無党籍の前立法委員康世儒（50歳）が立候補し一定の票を得る見込みだが，徐の当選を阻むには至っていない。							
台中市	民進党	林佳龍	国民党	胡志強	無党籍		その他	0名
	現職の胡志強（66歳）は合併前の旧台中市で2期，合併後の大台中市で1期市長を務めたので，今回再選されれば旧台中市のエリアでは4期17年市長を務めることになる。台湾では地方の首長は法律で2期8年までと決まっている。台中市は合併したので大台中市で改めて2期8年務めることは制度的には可能であるが，台湾の市民感覚では「長すぎる」という印象は免れない。そのため胡志強もバトンタッチを考えたが，後継候補を決めることができず本人の続投となった。林佳龍（50歳）は2005年の旧台中市長選で胡志強に大差で敗れて以来台中で活動を続け，2012年には国民党の現職黄義交を「分割投票」によって破り勢いに乗る。林は游錫堃派であったが，今は台中市で自前の勢力を築く。胡志強は一定の実績を残しているが「長すぎる」という声には勝てず，支持率で最初から林に差をつけられたまま終盤戦に至った。旧台中県の地方派閥は胡志強支持を表明しているが，内部に足並みの乱れがある。選挙情勢は林佳龍が一貫してリードし安定化したため，このまま投票日を迎えるであろう。しかし，台中市の国民党の基礎票と胡志強個人の人気も底堅いので，民意調査で示されているほどの差は開かない見込みだ。							
彰化県	民進党	魏明谷	国民党	林滄敏	無党籍	黄文玲	その他	1名
	民進党の魏明谷（新潮流派，50歳）と国民党の林滄敏（56歳）との立法委員同士の戦い。基礎票で国民党優位であるが，民進党との差はあまり大きくない。加えて彰化県の地方派閥は分裂を繰り返し，いくつもの政治家族が割拠している状態にあるので，過去に民進党が勝ったことが何回かある。公認を得た林滄敏の勢力と現県長卓伯源の勢力は対抗関係にあり，国民党は内部に矛盾がある。民進党は食品安全問題などで馬政権批判を繰り広げ追い上げてきた。接戦で終盤戦を迎え激しい戦いとなっている。台聯の立法委員を務めた黄文玲が無党籍で出馬している。緑陣営なので魏明谷にとって票の分散を防ぐことも課題だ。黄文玲の得票は「棄保」により落ち込む見込みだが，接戦なのでそのわずかな票が影響する可能性もある。一方，彰化県は台中市と一体の生活圏にあり，林佳龍人気が一定程度彰化県にも流入し魏明谷を後押しする可能性もある。終盤で勢いをつけた魏に逆転の可能性もある。							
南投県	民進党	李文忠	国民党	林明溱	無党籍		その他	0名
	基礎票で国民党が優勢であるが，現県長李朝卿が汚職事件で逮捕され停職となったため国民党に暗雲が漂った。南投県は呉敦義副総統の地盤でもあり国民党は負けら							

	れない。立法委員の林明濤（63歳）が予備選挙で勝利し国民党公認を得た。林明濤は地元密着型政治家で派手さはないが地道な仕事ぶりが評価されている。民進黨は前回立候補した李文忠（新潮流派、56歳）を再度擁立した。李朝卿県長の汚職や馬政権の不人気、食品安全問題で民進黨に攻め手はあったが、李文忠は波に乗れていない。李文忠陣営は途中から台中・彰化・南投の中部三縣市連携をアピールし林佳龍人気に乗る戦略に切り替え追い上げをはかったが、林明濤の当選確実。							
	民进党	李進勇	国民党	張麗善	無党籍		その他	0名
雲林県	<p>民進黨の予備選挙は李進勇（63歳）、李應元（61歳）、劉建国（45歳）の3名が争い、蘇治芬県長が推す李進勇が公認を得た。李進勇は雲林県四湖郷出身で、1997年に基隆市長に当選、その後陳水扁時代に内政部次長などを歴任、北部での活動が長かったが、雲林県の代理県長を務めたこともある。2012年立法委員に出馬し、県内の最大地方派閥を率いる張榮味の娘張嘉郡をあとも一步というところまで追い上げた。しかし、李進勇は、9年間県長を務めた蘇治芬（無派閥、61歳、女）より年齢が上で、また、名を知られることになった基隆市長当選も李登輝時代のことである。対抗馬の張麗善は張榮味の妹で、立法委員の経験もあり知名度も高く今年50歳で比較的若い。張麗善と比べると白髪の李進勇は実際以上に年齢の差があるように見える。張麗善は公益活動や福祉活動をアピールし、ある程度地方派閥の暗いイメージから切り離すことに成功している。民進黨が「張派は黒金」を強調しすぎると、民進黨も100%白と言い切れないので中間派選挙民の反感を買う。民進黨は馬政権への不満を李進勇の支持に向けさせたいが、張麗善は馬政権にまったく触れないし、馬英九の応援も依頼していない。基礎票は民進黨が上で郷鎮長選でも善戦しているが、候補者の魅力は国民党が上なので大接戦となっている。鍵は民進黨の蘇治芬県政への県民の評価である。最後は、投票日の前日か当日に投票先を決める政党意識が薄い本当の中間選挙民の動向で決まるであろう。ローカルな雲林県の勝敗は今回の統一地方選全体の評価に関わり、選挙後の台湾政局にも影響を及ぼすことになる。</p>							
	民进党	張花冠	国民党	翁重鈞	無党籍		その他	1名
嘉義県	<p>基礎票で民進黨が優勢なので、再選を目指す現職の張花冠（陳明文派、60歳、女）の当選確実。国民党系地方派閥黄派の翁重鈞（59歳）は今後の影響力を保てる得票を狙う独自の戦い。国民党が40%の防衛線を守れるかどうか焦点。</p>							
	民进党	涂醒哲	国民党	陳以真	無党籍		その他	4名
嘉義市	<p>濁水溪以南で国民党が執政する唯一の縣市。2012年総統選挙で蔡英文の得票が馬英九を上回ったので民進黨の期待は大きかった。民進黨は前回も出馬した涂醒哲（独派、63歳）を公認。涂は陳水扁時代に衛生署長（閣僚）、その後立法委員（比例区）を務めた。国民党は37歳の女性候補陳以真を立てた。涂は前回出馬した際の選挙活動が不十分であったという批判が党内にあったが、今回は陣営を整え積極的な活動を行なった。陳以真は2012年立法委員選挙に金溥聰の勧めで嘉義県の選挙区から</p>							



	<p>立候補した際、イメージだけで政策が弱いと批判され票が伸びなかったが、今回は政策論述の強化と選挙民へのフォローを重視した。双方とも弱みを修正して選挙戦に臨んだのである。陳以真是3月に発生したひまわり学生運動を公然と支持し馬政権から距離を置く選挙戦略を展開した。序盤戦は涂がリードしていたが、中盤戦で陳が逆転し、終盤戦で陳のリードが固まった。涂は馬政権への不満を十分には取り込めていない。候補者の魅力の差が決め手になりそうだ。新制嘉義市が1982年に発足してから今日の黄敏恵まで嘉義市長選の当選者はすべて女性である。</p>							
台南市	民進党	賴清德	国民党	黃秀霜	無党籍		その他	0名
	<p>再選を目指す民進党の現職賴清德（新潮流派、55歳）が圧倒的に優勢。得票の差をどこまで広げるかと民進党の市議員当選数が焦点。国民党の黃秀霜（53歳、女）は台南大学の校長であるが、地方政治の経験が乏しいため知名度が低い。国民党の男性市議候補とのツーショット写真を使った大型看板を出したが、それを見た選挙民が市議候補の夫人と勘違いしたという笑い話がある。台湾の中南部では経験の乏しい学者を候補に立てると、前回の雲林県がそうであったように、恐ろしいまでに引き離される。台南の国民党は35%の防衛線を守れるかどうかの瀬戸際にある。</p>							
高雄市	民進党	陳菊	国民党	楊秋興	無党籍		その他	1名
	<p>再選を目指す民進党の現職陳菊（新潮流派、64歳、女）が圧倒的に優勢。得票の差をどこまで広げることが焦点。8月に発生したガス爆発事故で市政府の責任も免れなかったが陳菊市長の人気は逆に上昇した。それ以降、陳菊のフェイスブックの「いいね」の数が爆発的に増加する。陳菊は新潮流派であるが、高雄で独自の勢力を築いているので菊派と呼ぶ方が实际的だ。陳菊が親鴨となり市議会の過半数確保に力を入れている。楊秋興（58歳）は元民進党籍の高雄県長であったが、前回合併後の高雄市長選に向けた民進党の予備選挙で陳菊と争い敗れ、民進党を離党して無党籍で出馬しやはり敗れた。楊秋興はその後馬政権に閣僚として加わり国民党に入党した。今回国民党から出馬したが、支持率は陳菊に引き離されたまま終盤戦を終えようとしている。楊秋興のフェイスブックの「いいね」の数は平均すると陳菊のより桁一つ少ない。国民党は高雄市で底（最低40%の防衛線）が抜けるかもしれない。</p>							
屏東県	民進党	潘孟安	国民党	簡太郎	無党籍		その他	0名
	<p>民進党公認の立法委員潘孟安（新潮流派、51歳）が基礎票の優勢と知名度の高さを活かして当選確実。国民党の簡太郎は屏東県出身の67歳、中央で内政部長を長く務めたが屏東県との直接のかかわりは薄い。中央から派遣されたという印象がぬぐえない。食品安全問題で屏東県政府が食用油の原料をごまかして製造していた会社を査察で見逃していたことが発覚し、民進党籍の現県長曹啟鴻への批判が高まり潘孟安圧勝の流れが多少変わった。しかしその後、屏東県の国民党支部が潘孟安のイメージ低下を狙った偽情報ビラを配布したことが発覚し、簡太郎は反転攻勢の機会を失った。国民党の候補擁立戦略に問題があったと言える。</p>							

宜蘭縣	民進黨	林聰賢	国民党	邱淑媿	無党籍		その他	0名
	再選を目指す民進黨の現職林聰賢（新潮流派，52歳）が圧倒的に優勢。国民党公認の邱淑媿（52歳，女）は馬英九市長時代に台北市衛生局長を務めSARS対策に取り組んだことで知られている。しかし，宜蘭県とのかかわりは1997-2001年に宜蘭県衛生局長を務めたことがあるだけで地元との関係が薄い。馬英九人脈とみなされていることもマイナスである。国民党の候補擁立戦略に問題があったと言える。							
花蓮縣	民進黨	none	国民党	蔡啟塔	無党籍	傅崐萁	その他	5名
	再選を目指す無党籍の現職傅崐萁（52歳）が圧倒的に優勢。花蓮県では泛藍勢力が非常に強く，民進黨は候補を立てることさえままならない状態が続いている。元親国民党立法委員の傅が国民党の基礎票も取り込み王国を築いた。夫人を副県長に任命しようとしたり，自分が選挙中に汚職の有罪判決が確定し候補者資格を失っても大丈夫のように夫人も同時に立候補させたりするなどやりたい放題であるが，県民の満足度は高い。国民党も候補は立てたが相手にならない。							
台東縣	民進黨	劉耀豪	国民党	黃健庭	無党籍		その他	0名
	再選を目指す国民党の現職黃健庭（55歳）が優勢。民進黨の劉耀豪（無派閥，47歳）は，前回県長選挙で基礎票の劣勢の中，個人票を伸ばして健闘，2012年立法委員選挙では国民党票の分裂を衝いてついに当選を果たした。民進黨は台東県でわずかずつではあるが勢力を伸ばしているが，国民党と1対1で勝利するには至らない。							
澎湖縣	民進黨	陳光復	国民党	蘇崑雄	無党籍		その他	0名
	伝統的に国民党の基礎票が民進黨より多いが差は小さい。民進黨公認の陳光復（59歳）は2005年県長選挙で現県長の王乾發と競って僅差で敗れた。2012年立法委員選挙では民進黨の楊曜が当選5回の泛藍の現職林炳坤（無党団結聯盟）を破ったので民進黨に十分チャンスがある。蘇崑雄（58歳）は国民党の予備選挙で勝つには勝ったが僅差であり，予備選のプロセスでは雑音がかなり発生し，国民党票をすべてまとめるのは難しい状況にある。僅差であるが陳光復リード。							
金門縣	民進黨	none	国民党	李沃土	無党籍	陳福海	その他	8名
	7万人ほどの選挙人しかいない金門島の政治生態は極めて複雑で，同じ数名の政治家が長い間立法委員選挙・県長選挙で競い合い，汚職に手を染めるということを繰り返している。政治環境が台湾本島とは異なり，民進黨は県議会の議席獲得を目指すのが精一杯である。再選を目指す国民党の現職李沃土（54歳）がリード。							
連江縣	民進黨	none	国民党	劉增應 楊綏生	無党籍		その他	0名
	連江県は離島で選挙人数は1万人に満たない。毎度のように国民党が2人公認するので，国民党の得票率が100%となる。							

出所：過去の選挙のデータ，報道，および関係者の話を総合して小笠原が整理した。

《表1》の選挙情勢を数値で示したのが次の《表2》である。今回の確定選挙人数は11月25日に発表されるので，ここでは2012年総統選挙の選挙人数で代用する。縣市別の投票率は筆者が考えた数字である。これをかけることで予測投票数が出てくる。各候補の得票率と得票数も計算してあるが投票前に掲載することは控える。ここでは幅を持たせた得票率予測を記載しておく。

《表2》 県市長選挙の投票数と政党別得票率の予測数値

県市	投票数予測			得票率予測 (%)			
	選挙人数	投票率	投票数	民进党	国民党	無党籍	その他
基隆市	302139	56%	169198	44-46	25-27	27-29	1
台北市	2102664	68%	1429812	-	45-47	52-54	1
新北市	3074849	68%	2090897	43-45	55-57	0	-
桃園県	1506311	60%	903787	44-46	54-56	0	-
新竹県	384261	68%	261297	-	57-59	40-42	1
新竹市	312118	58%	181028	35-37	49-51	12-14	1
苗栗県	436219	68%	296629	29-31	51-53	16-18	1
台中市	2018158	70%	1412711	51-53	47-49	-	-
彰化県	1005714	66%	663771	48-50	48-49.5	1.5-2.5	0
南投県	411482	65%	267463	45-47	53-55	-	-
雲林県	563034	68%	382863	48-52	48-52	-	-
嘉義県	431588	72%	310743	59-61	39-41	0	-
嘉義市	205711	70%	143998	46-48	51-53	1	0
台南市	1485047	69%	1024682	65-67	33-35	-	-
高雄市	2192005	70%	1534404	59-61	39-41	0	-
屏東県	684517	68%	465472	61-63	37-39	-	-
宜蘭県	358059	68%	243480	57-59	41-43	-	-
花蓮県	263888	58%	153055	-	24-26	64-66	9-11
台東県	178938	60%	107363	44-46	54-56	-	-
澎湖県	77817	64%	49803	51-53	47-49	-	-
金門県	83949	53%	44493	-	40-45	30-34	24-28
連江県	7987	70%	5591	-	100	-	-
総計	18086455	67.1%	12142540	43-44	46-47	10	-

※これは民意調査の数値ではありません。選挙人数は今回選挙の数字ではありません。

※這個數值不是民調的，是筆者基於過去選舉統計及個人經驗來預估的數值而已。選舉人數的公告是11月25日，所以在這裡以2012年總統選舉的選舉人數代替。請注意。

## 【まとめ】

《表1》《表2》のように、22 県市のうち雲林県と彰化県を除く 20 県市については、国民党 10、民進党 8、無党籍 2 という方向が見えている。接戦となっている雲林県と彰化県の結果が現状通り雲林は民進党、彰化は国民党であれば、22 県市のうち民進党が現有 6 から 9 へ増加、国民党が現有 15 から 11 へ減少、無党籍が 1 から 2 へ増加となる可能性が高い。

《表3》 全 22 県市の国民党籍、民進党籍、無党籍の変化

	2009-2010 年選挙結果	2014 年予測 (雲林県は民進党, 彰化県は国民党の場合)
国民党	基隆市 台北市 新北市 桃園県 新竹県 新竹市 苗栗県 台中市 彰化県 南投県 嘉義市 台東県 澎湖県 金門県 連江県 (15 県市)	新北市 桃園県 新竹県 新竹市 苗栗県 彰化県 南投県 嘉義市 台東県 金門県 連江県 (11 県市)
民進党	雲林県 嘉義県 台南市 高雄市 屏東県 宜蘭県 (6 県市)	基隆市 台中市 雲林県 嘉義県 台南市 高雄市 屏東県 宜蘭県 澎湖県 (9 県市)
無党籍	花蓮県 (1 県)	台北市 花蓮県 (2 県市)

国民党がこのまま台北市と台中市を落とせば、六都のうち現有の 4（台北市、新北市、桃園市、台中市）が 2 になる。これだけで台湾メディア・海外メディアの見出しは「国民党大敗」となり、党内で馬英九に対する厳しい批判が噴出するであろう。選挙の評価は「国民党大敗」で間違いはないが、今後の影響を考える上で重要な要因が 2 点ある。一つは両党の得票総数の比較であり、もう一つは雲林県・彰化県の勝敗である。

### ①得票総数

《表4》 両党公認候補と無党籍候補の得票数合計

	民進党	国民党	無党籍
得票数	5,254,877	5,647,567	1,164,959
得票率	43.5%	46.8%	9.7%

《表2》の各候補の得票率予測の中間値をとって民国両党の公認候補および無党籍候補の得票総数を試算したのが《表4》である。公認候補の得票総数では、国民党が約 565 万票で、民進党の約 525 万票に対し約 39 万票リードの予想となる。選挙委員会から発表されるのはこのカテゴリーの数字である。しかし、これでは台北市の柯文哲の票がカウントされないため、総統選挙を展望するには不十分である。そこで、各県市で一定の票を得た無党籍候補の得票を機械的に藍・緑のどちらかの陣営に編入してみる。もちろん、柯文哲の得票が総統選挙で 100%民進党に投じられるわけではないし、傅崐萁の得票が 100%国民党に投じられるわけではない。現時点での藍緑陣営の大雑把な勢力比を把握するのが目的である。



《表5》のように、試算の結果は、泛緑陣営が約616万票で、泛藍陣営の約586万票に対し約30万票のリードとなった。この通りの結果となれば、国民党の「大敗」という判断に変わりはないが、立ち上がれないほどの打撃とまでは言い切れない。国民党がほぼ最悪の条件下で選挙に入ったことを考えれば、「踏みとどまった」という評価も出てくるであろうし、柯文哲の票のうち総統選挙で民進党に行くのは何割くらいなのかをめぐっても議論は紛れてくるであろう。しかし、筆者が予想する以上に国民党の得票が落ち込み「底が抜ける」状態（柯文哲の票を除いた公認候補の得票総数の比較で民進党が国民党に並ぶ状態）になれば、国民党への打撃は非常に大きく政権交代の気分が強まるであろう。

《表5》無党籍候補の得票を泛緑・泛藍両陣営に割り振った場合の得票数合計

	泛緑	泛藍	その他
得票数	6,155,472	5,858,247	53,685
得票率	51.0%	48.6%	0.4%

## ②雲林県・彰化県の結果

雲林県と彰化県は人口では台中市に遠く及ばないが、今回の選挙で非常に重要な地区である。雲林県と彰化県の両方とも民進党が勝つと仮定すると、全22県市の帰結は民進党10、国民党10、無党籍2となり民進党と国民党の席数が並ぶ。席数以上に重要なのは、民進党が雲林県を橋頭堡として彰化県、台中市へと進撃することの政治的・心理的効果である。民進党の勢力拡大が誰の目にも明らかになり国民党内は浮足立つであろう。オセロのゲームで重要な陣地がひっくり返ってこれで負けるというのと似た予期心理が働くであろう。

逆に、国民党が彰化県と雲林県の両方を取った場合は、民進党8、国民党12、無党籍2となり、国民党の「大敗」は緩和される。民進党が彰化県を取っても雲林県を落とした場合は、表面的には《表3》と同じ民進党9、国民党11、無党籍2となるが、政治的インパクトは異なってくる。オセロで言えば、雲林に青の取っ掛かりができたので次は台中と彰化を挟んで再度青にひっくり返すことができるという期待が働く。民進党が雲林県を落とせば、台中市で勝利した効果も半減するであろう。国民党は台中市と彰化県を落としても雲林県を取ることさえできれば巻き返しのチャンスは十分あると見なされる。

今回の地方選挙では馬政権の不人気は確かに各地で影響しているが、選挙の帰趨を決める重要な要因は候補者の優劣という傾向が、より強まっている。国民党はほぼ最悪の条件下で選挙に入ったが有力な候補を擁した新北市や嘉義市では悪条件をはね返している。新北市は国民党の地盤であるが、雲林県は民進党の地盤である。そこで勝てた場合、よい候補者を立てれば国民党は次の総統選挙で十分勝てるという評価になる。国民党の「大敗」にもかかわらず、党内ではポスト馬英九の候補者に期待が集まっていくであろう。このように、雲林・彰化の両県の結果は台湾政局全体に非常に大きな影響を与える。今回の選挙結果を評価するには、22県市のうちのいくつ、六都のいくつという数の問題だけでなく、両党の得票総数の比較と雲林県・彰化県の結果とを合わせて検討する必要がある。(2014年11月22日)



ミニ集会での演説終了後、自著『白色的力量』にサインのサービスをする柯文哲候補。サインした本の数は50冊くらいあった。(2014年11月14日撮影)



王金平立法院長が連勝文候補の応援に駆け付けた。国民党の内紛が連候補の選挙情勢にも微妙な影響を及ぼしている。(2014年11月14日撮影)



台中市の林佳龍、彰化県の魏明谷、南投県の李文忠の3候補の合同集会。会場は2〜3万人、かなりの盛り上がりであった。(2014年11月16日撮影)



国民党市議候補の応援に駆け付けた胡志強市長。人気は以前より衰えたとはいえ底堅い。通行人が足を止める光景が見られた。(2014年11月16日撮影)



候補者の魅力全開の国民党張麗善候補。馬政府・国民党にほとんど触れず「自分」をアピールした。雲林県斗南鎮にて。(2014年11月15日撮影)



斗六市の夜市で支持を訴える民進党の李進勇候補。隣の劉建国立法委員の方が若干人目を多く引いているように感じた。(2014年11月15日撮影)